釣魚礼讃

盛川宏

中公文庫

中公文庫

釣魚礼讃（ちょうぎょらいさん）

定価はカバーに表示してあります。

1997年3月3日印刷
1997年3月18日発行

著者　盛川　宏（もりかわ　ひろし）

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Hiroshi Morikawa

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202817-5　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

釣魚礼讃

盛川　宏

中央公論社

目次

1 四季、釣れづれなるままに 9

歳時記 11

子持ち鯊 17

烏賊鯛 23

三月鮃 29

初物 35

夏河豚 41

釣秋 47

彼岸鯊 53

くだり鰹 59

落ち 65

ならい 71

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

節会料理 78

2 釣れようと釣れまいと 85

五目釣り 87
こませ 93
化け 100
びっくり合わせ 106
咥え煙草 112
やらせ 118
裏技 125
移り気 131
三つの夜 138

3 ひそやかに夢を紡ぐ 147

初心 149
穴場 155
船宿弁当 161

前戯 167
釣運 173
アイデア釣り具 179
スナック 185
魚名考 191
釣り具店 198

4 釣って成仏、食べて功徳

風干し 207
皮肉 213
花鳥賊 219
真鱈 225
関鯖 232
蛸飯 238
針千本 244
干物 250
深川飯 256

旨味 262
美味求真 268
西の味、東の味 274
文庫版あとがき 281
解説 塩田丸男 285

釣魚礼讃

1

四季、釣れづれなるままに

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

歳時記

さいじき（歳時記）①一年のうち、そのおりおりの自然・人事百般の事を記した書。歳事記。②俳諧で季語を分類して解説や例句をつけた書。俳諧歳時記。〔広辞苑〕

『日本大歳時記』の刊行の辞にはこう書いてある。

「俳句作者は勿論のことだけれど、俳句を詠まぬ人でも歳時記を書架に備え、暇のある毎にとり出して読むのは楽しいものだそうである。―略―ただ漫然とページを繰っているだけでも楽しいものである。―略―」（水原秋櫻子）

ぼくの辞書では「釣って楽しみ、詠んで楽しむ」のが釣りの世界だというふうになっている。晴釣閑読といい替えてもいいだろう。

桜も満開になって文字どおりの〝釣春〟である。渓流釣りに出かけて新緑が目にしみ、ヤマメやイワナたちに出会うとその風景や光景を詠みたくなる。釣りをする人の

なかでもこうして目にしたものを歌や句に託する人が多いようである。

子供のころから辞書や歳時記などを眺めたり読んだりすることが好きで、折りにふれては下手な句を詠んだりもしていた。しかし「坊主礼賛」を書くようになってから、そうした関係の書物などをひもとく機会がにわかに増えて、毎日が勉強みたいな感じである。

〈仏法僧いづち渓精渕より出で〉という句はぼくが何年か前、越後の早出川（はやで）にイワナを釣りに出かけたときに作ったものである。早出川はダムからいきなり杣道（そまみち）で、林道はまったくなく、いわゆるゼンマイ道というものだった。たしか冠松次郎の「松次郎ぜんまい道」と呼ばれていた記憶がある。山ビルが頭上から降ってくる物凄いところをまる半日も歩きつづけてテントを張り、三日間も山に入っていた。ゴルジュを越えたり高巻きをしたり大変だったが、仏法僧がよく啼き、夜半には小動物がテントの外で動きまわり賑やかだった。渓精であるイワナの八寸もあるのが釣れて焚火で焼いて食べたのだが、他のどんな食べ物よりもおいしかった。

伊豆の河津（かわづ）川で初めてアユの友釣りを本格的にやったのももう何年も以前である。

〈石に居て石に還れぬ年魚かな〉という句もそのときのものである。アユは石につい

ている。だが、オトリを追って引っ掛かってしまうと、もう元の石には戻れない。アユは年魚である。そのはかない生命をそう表現したのだったが、「あの句はいったいどういうことなのでしょうか？」と二、三の人たちに尋ねられたものだった。

自分の独りよがり独り合点であって、ほかの人にはわからないというのであれば駄作であり、失敗作である。

ところが歳時記をひもといてみると、いろいろ有名な人の句がたくさん出てくる。歳時記は辞書でもあり図鑑めいた感じのものもあって、ぼくが愛用しているのは『日本大歳時記』（講談社）の新年から冬までの五巻だ。

〈ランプ明り岩魚骨酒廻し飲み〉（福田蓼汀）

これなど天幕を張って酒盛りをしているイワナ釣り師の光景が手にとるようにうかがえて楽しい。天幕のそばの木にぶらさがっている石油ランプ。ぼんやりとした灯火の下で、おそらく飯盒（はんごう）の蓋（ふた）みたいなものに焼いたイワナを入れて酒を注ぎ、仲間同士で回し飲みしている感じがよく出ている。だが、これは実は天幕ではなくて、小さな山小屋でもいいし、ひなびた温泉宿であってもいっこうに差しつかえはないのだ。どちらでもよく似合っている。

晴釣雨読についてはこれまでも折りにふれて書いてきたが、釣りに出ない日など釣りの古典や歳時記を開いてみる。当然、いま現在の季節の項が多くなる。春告魚であるメバルの個所をのぞいてみると、ある、ある。

〈夕山吹めばるの煮付そり返り〉（永井東門居）

山吹の黄色い花が咲きだす四月は渓流魚釣りのシーズンである。ぼくは山吹の花が谷間のせせらぎのそばで咲いている風景を思い出すことができるし、飾り包丁を入れたメバルが煮られてそり返るようにしてお皿の上にのっかっているさまがうかがえるのだ。

江戸前の釣りといえば、この季節はいわゆる〝花見ガレイ〟だが、下町の船宿にはたくさんのカレイやアイナメの魚拓が貼り出されている。稚拙なものも、凝った彩色魚拓もまじってそれだけで楽しいのだが、なかには添書きでいろんなことが書かれていたりもする。

〈真子鰈　親も子もいて孫もいて〉とか、〈真子鰈　華麗に舞って春の海〉とか、カレイを華麗にひっかけたりして、しゃれたつもりのものまである。これが俳句であるのか川柳のつもりなのかは定かではない。けれども、みんなカレイが釣れて嬉しくて

いろいろ書いてみるのであろう。釣りにはそういう楽しみ方があったっていいわけである。

ぼくは正式に俳句の勉強をしたわけではなくていつの場合も我流、手前勝手に作っている。ぼくのまだずっと若い時分の文学上の師匠は小寺正三さんである。昔『大阪作家』という同人雑誌を出しておられ、ご自身も「家」という小説を『新潮』に発表され、これは芥川賞の有力候補になったが、もともとは日野草城主宰の『青玄』の無鑑査同人で、亡くなられた楠本憲吉さんや現在の『青玄』を主宰されている伊丹三樹彦さんらとともにいい句をたくさん作られる俳人でもある。

ぼくが小寺さんに教わったのは俳句ではなくて散文だった。だから俳句のことは皆目わからないのだ。小寺さんは現在も池田市に住まわれて『俳句芸術』という月刊誌を主宰され大いなる文化活動をなさっている。そのうち六十の手習いで師匠に添削を受けようかなどとも考えている。

日野草城の名前が出てきて思い出したのが桜鯛の句である。これは凄い。

〈鰈（かれひ）らは乞食魚（こじきうお）かも桜鯛〉（草城）

鑑賞は鷹羽狩行さんである。「――略。鰈は味も上品、値段も安い魚ではないが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com